

中国旅行詠の世界 — 長江(巴蜀三峽) —

高崎淳子

玉露 洞傷す 楓樹の林

巫山巫峽 氣蕭森たり

江間の波浪は天を兼ねて湧き

塞上の風雲は地に接して陰る

叢菊 両たび開く 他日の涙

孤舟 一に繋ぐ 故園の心

寒衣 処処 刀尺を催し

白帝城高くして暮砧急なり

杜甫五十五歳夔州での作、「秋興八首」の一である。「書の至宝展」で趙孟頫の筆になる「秋興八首」を見、魅かれた。懐かしいものに遭う心地は何故かと自問した。南宋の皇族で元朝の高官となった極めて眉目秀麗だったという趙孟頫の書は、正調でまろやかさがあり、静かな情意を感じさせ、白帝城を訪れた過日の感動を蘇らせ、満ちたりた静かな思いをくれた。杜甫の詩の中でも好きな詩群に入る。「秋興八首」が新たな魅力をもって立ち上がったのである。

白帝城から夔門をながめれば、「不尽の長江滾滾として来る」水の時間に圧倒される。「岸は双屏の合するに似て 天は匹練の開く

が如し」白居易の「夜瞿塘峽に入る」の詩句が、漢詩的誇張ではないことを実感する。赤甲山と白塩山がなす絶壁の門から、絶景らしい奇景が展開する。青海チベット高原の雪解けの水が咲かせた花や、岷江、嘉陵江などあまたの江が潤した四川盆地の春秋を思い、巴蜀文化や、楚の国を思えば、四次元的山水長巻が生まれる。

「三峽クルーズ」という定番観光の瀬に身を乗せてさえ、緊張感がある。夜郎に流されるはずの李白が、赦免されて下る千里の江陵への心弾みは、三峽の伝統的イメージを活用した李白のダイナミズムである。三峽の象徴である猿声が悲哀を感じさせないのも、愛誦されてきた所以だろう。「五月峽を下れば、死すとも弔はず」の三峽を含む四川から海への要路にどれほどの詩碑が存在するだろうか。詩魂がさまよう空を飛ぶことにする。

「隴を得て蜀を望む」の喩を知ったのは、『棧雲峽雨日記』であった。しかも、この喩の心を旅の中で体験した後であったので、修辭を越えた真理として深く感銘したのである。

明治八年(一八七五)乙亥の歳の十一月、わたしは森公使に

随行して清国に渡航した。

北京の公使館に駐まること数か月、四川から来た旅行者が、その地の山水風土について語るのを耳にするたびに、わたしはそぞろ心も落ち着かず、魂は四川に飛ぶ思いで、お庄さえようにも庄さえきれなくなつてしまつた。かくして公使にお願いし、津田君亮とともに、九年（一八七六）五月二日旅装をととのえて出発した。時に清朝の暦では光緒二年四月九日のことであつた。

竹添井井は明治の漢詩人として四川へ旅した。「はじめに」の起筆の感動に清々しさを感じた。森公使は、初代文部大臣になる森有礼である。明治八年に駐清全權公使として中国に赴任した時、竹添井井は清国天津領事、清国公使館書記官となつてゐる。北京から百十一日の長途の旅をした日本人の旅日記は、蜀棧道と三峡をイメージさせる題名を冠し、漢詩人がどれほど四川の山水風土に強く憧れたの旅であるかを示している。東洋文庫の一卷は、岩城秀夫訳注で、一般にも解りやすい現代語で、その世界をみせてくれる。

華山や驪山を経て、五月三十一日に西安に到着し、六月四日馬嵬坡を過ぎる一文がある。当時、楊太真の墓として小さな丘がわずかに残り、物淋しい祠があるにすぎなかつたことが判る。私が一九九三年に訪れたときには、美しい曲線の楊貴妃像もあり、りっぱな半球墳が出来ていた。もちろん則天武后の乾陵に比較すれば、その生涯を物語る小さな墓所にすぎない。

一行が蜀に入ったのは、六月二十日あたりである。陝西省、甘肅省の境から四川省に入つてゐる。魏蜀が争つた陽平関に出て蜀の難

道に出、諸葛孔明が基地として軍議を開いた朝天鎮籌筆に入るルート（昔の籌筆）を杜甫もとつたらしいが、六月二十一日に神宣駅（昔の籌筆）を過ぎ、二十二日朝天嶺を越えている。この日千仏崖に着いた条がみえるが、利州広元市は西蜀第一の宿駅であつた。七月二日成都に入り、二十日重慶に着く。嘉陵江が北から長江に注いでいるところ朝天門は現代でも舟のターミナルである。

巫山県に泊す

千古の陽台 定めて若何いかん

翠鬢 旧に依りて晴波に燕ひたる

孤舟 載せ得たり巫山の夢

雨と為り雲と為りて恨み更に多し

七月二十二日長江に乗り出し、巴峽、草峽、巴陽峽、夔州、瞿唐峽、白帝城、風箱峽、巫峽、西陵、武昌、南京、上海まで、とくに三峡を中心に記述は詳細で楽しい。

瞿唐は猛将が戦陣にのぞみ、皆裂け怒髪天を衝き、望むべくして狎あそむべからず、といつたところである。思うに巫峽はよく瞿唐の奇観を兼ね備えているけれども、瞿唐は巫峽ほど多くの奇勝を有することがないのであつて、ここにおいて二峽の優劣は判然とするであらう。

巖の間に処処に滝が懸つていて、その多いことは一一数えあげることができないほどで、さやさやと音するのは、松風の音をきくようである。

この優劣観は説得力があり、美しい風景を再現している。明治の漢詩人が見た長江は山水動画の世界である。

大陸をしかばねの山血の河となしはてて 何を 遂げんとせしか
然りたがいに過去の苦難は忘れざれ かくて新たな今日の友情

おり立つや 高くこごしき蜀道の この夕空よ 千年の後
石だたみ露ふふみゆくや 詩史堂も工部祠も今 わが前にあり
銃とりてわれは来ざりき 大橋の影をひたせる長江の上
一千年 杜甫をはなれて迷いたる人間の詩よ ふたたび帰れ

土岐善麿「四月抄」一九六三年二月刊

土岐善麿は昭和三十五年四月、「中国文字改革視察日本学術代表団」の団長として北京に赴き、帰路成都を訪れた。また、三十九年秋には、日中文化交流協会代表団の代表として北京の中国建国十五周年国慶節祝典に参列している。歌集「四月抄」は第一回目の中国旅行詠を取めている。歌集以外にも善麿がこの旅について述べた「杜甫草堂記」から、なみなみならぬ思いを読み取ることができ。

漢字が減びなければ中国は必ず滅びると説きし魯迅の眼の前に立つ

「文字改革」の視察団としての訪中であるので、上海の魯迅記念

館で魯迅像を前にかく詠う。白話文学を目指した五四文化革命の中心人物である魯迅が「漢字が減びなければ中国が減びる」という問題意識を表明するのは当然かもしれない。

中国は近代化と人間開放のために、より簡便な方向へ模索して文字改革をした。一九五六年国務院公布「漢字簡化方案」、一九五七年十二月公布「漢語拼音方案」、一九六四年三月公布「簡化字総表」と発展させ、現在の簡体字・簡化字は、この訪中の後整備されていく。当時国語審議会の任務にあたった善麿であるが、「杜甫草堂記」の終章に近い「中国文字改革の方向」によると、日本の国語審議会には、ローマ字とローマ字教育、漢語の教学問題があり、中国の文字改革と日本の国語政策には共通点があったようである。

また、魯迅より十一歳若く長命であった郭沫若と北京の人民大会堂内の四川省室で初めて話をしている。二度の訪中で友情を結び、彼が亡命中住んでいた市川の須和田に詩碑が建立（四十二年四月）されたときの感慨を詠っている。

やわらかき握手のちからもわずれ難し かの四月の さらに十月の 北京の対話

市川の旧居に建つる詩碑の文字 あざやかに深し 友情もまた『東西抄』一九六七年十二月刊

郭沫若は四川省樂山県の人である。樂山大仏を見学するとき、ひとり彼の像にも会うことができる。長江の支流岷江に大渡河と青衣江が交わるところに樂山大仏が睨みをきかせている。

峨嵋山上的白雪

峨嵋山上の白雪は

もうあの一番高いみねを覆つたらうか

山腹に横たわるあの宿霧は

昔のようにうねっているのではないか

わたしが一番すきなのは月光の下で

紫けむるあの巍峨とそびえた山岳

見渡す限りほうつとした銀もやに

つつまれたあの静かなわがふるさと

ああ それがわたしのふるさとだ

わかれてからもう十五年になる

あの山の下の大渡河の流れは

滔滔としてつきない詩篇だ

(後半略) 一九二八年『恢復』

魯迅の「故郷」と中原中也の詩篇を思い出させる。李白「峨眉山月の歌」は挙げるまでもなく有名で、三峽に向かう李白の心情が「半輪の秋」で立つ絶句である。峨眉山は長く李白の絶句に支配された歌枕であったが、二〇〇五年年末晦日を金頂に宿し、元旦を迎える機会を得、「見渡す限りほうつとした銀もや」の世界であることを体験した。郭沫若の詩を実感できる。

善磨も三峽へ足をのほしたい気持ちにはあつたらしいが、日程的に無理だったのだろうか。長江の上に架かる大橋や再建されるであろう黄鶴楼を詠出し、『杜甫草堂記』に「長江の上」を残している。

念願の成都での草堂詣を果たし、飛行機で武漢へ出発するところから始まる。

黄土、緑、森。うねうねと曲がつて流れる錦江。嘉陵江は雲海の下らしい。右の窓に山岳の連なりが見えた、山地へかかる。雲が晴れてくる。涪江を越す。射洪。そこは杜甫が陳子昂の故宅をも訪ねた梓州における遊歴地である。北のほうに見えるはずの劍閣はどのあたりか。

万県で長江を横ぎる。二時間あまりの後、地図に恩施とあるあたりを過ぎたが、夔府はまさにその北に当たる。今の奉節県であるが、はるかで見えない。白帝城も、どうなっているのだろうか。杜甫は、そこに登って、「藜を杖つき世を嘆くものは誰子ぞや、泣血空にほとばしらしめて白頭を回らす」と願望したが、われわれも長江を船で下れば、断石の上に仰ぐこともできたであろう。

機中、「毛主席詩詞二十一首」大形本を出し、「長征」を話題にしている。

北京での公務を終えてからの、念願の成都行きは「晩年の幸運」として感謝が表現されているが、『杜甫草堂記』の記述は旅の初心者の感動と長年の情熱があいまって、楽しい。「四月抄」の「はしがき」によると『新訳杜甫詩選』第四冊の校正刷を見ている。また、『杜甫草堂記』の「杜甫の鉛筆」は、成都へ出張のため同便に乗っていた青年からその鉛筆をもらう条で、旅情の中の微笑である。旅のかばんにこの鉛筆始め入場券の紙切れまで持ち帰られたのである

う。

人間の詩とは何か。真の人間の心をうたつたもの、それは東西古今を通じて一千年前の杜甫を描いてない。彼が詩聖といわれるゆえんだ。日本の歌を学ぶものにとつても、これは同じことなのだ。昔から歌を新しくするための、いろいろな試みがなされてきた。善麿も明治このかた短歌の革新を考えつづけている。いつてみれば、真の人間の詩とは何かということを探しもとめる彷徨であつた。

それがいつからか、杜甫に親しみ、その詩の真髓にふれるようになってから、真の詩とはけつきよく、一千年前の杜甫に帰る以外にないことを確信するようになった。

冷水茂太著『土岐善麿の歌』の賛辞につきる思いで、この短歌を考ふる。啄木の三行書き短歌と善麿のそれは交流していて、似たような作風を感じさせるものもあつた。

指をもて遠く^{とほく}迎^{むか}へば、水いろの、
ヴォルガの河^かの

なつかしきかな。 土岐哀果(善麿)『黄昏に』一九二二年刊

この短歌を記憶している人は多いだろう。とても好きな作品である。若い時代の青春の叙情がロマンチックである。明治四十五年刊『黄昏に』の巻頭歌から、杜甫の歌まで、善麿が歩いてきた道は、そのまま短歌史に重なる。五十年の歲月とその間の日本の歴史

史を考えさせる。新聞記者としての長い時間を持つ善麿が、『六月』で「遺棄死体数百といひ数千といふいのちをふたつもちしものなし」と詠った。中国旅行詠においてもその視点・思想を裏切つてはいない。日中戦争を経験した日本人が一般的に持つ気持ちより深い視線がある。善麿の中国旅行詠はそれを含有し、政治的文学的活動の友好的旅情と、杜甫への希求的詩情といえる。四川へ蜀へ駆り立てられたひとりとしての感動は率直で感動を共振させる。最初の訪中は戦後断絶した国交が回復する一九七二年の十二年前、ちょうど六十年安保の年であり、戦後短歌としても『四月抄』は記念碑的である。

二度目の訪中帰路、北京から長安、洛陽を歴遊し、香港からの帰途搭乗機の故障に遭遇した。その折の短歌を挙げておきたい。

不時着陸 たがいに顔をみるさえも あやしきまでに静かなる

かな

いまさらに惜しきいのちぞ いざ祝杯 ここは香港のテンブラ

料理

土岐善麿『連山抄』一九六六年刊

日中国交回復が実現したのは、一九七二年のことであつた。石川一成は一九七九年三月から約二年間四川省重慶に赴任している。

中国四川省重慶市の外国語大学へ神奈川県より出張を命ぜられて教へに行つた。まだ外国人の滞在してゐない街であつた。高温多湿の地で夏は五〇余度の日もあつた。霧の街としてロン

ドンをしるぎ、紅岩の街、坂の街、谷の街であり、山城の異名をもつ都市であつた。出発の直前に春の嵐が強まつた。

この詞書で始まる『長江無限』は二年間の任務の後一九八一年三月帰国までの作品を主に収め、一九八四年交通事故で永眠された後、一九八五年十月二十三日遺歌集として出版された。国交回復後でもない中国へ、まして四川省重慶という奥地へ赴任した人の苦悩が詠出されているのは述べるまでもないが、そんな中であつて、一首不思議な印象を残す作品がある。

昼の雨がそのまま夜の雨となり清艶観音の石にしみる

『長江無限』に付いている「重慶日記」によれば、昭和五十五年四月六日に大足石窟に赴いた由が、感動をもつて記され、この観音が北山石窟の水月観音で、端麗な美しさから、石川氏によつて清艶観音と名づけられたものであることが分かる。この感動は日本の新聞に詳しく発表される。同年六月十四日読売新聞の夕刊は「中国・大足石窟の石仏群」という見出しで、「異質の文化を包摂―壮大なエネルギーを見る思い」で総括された「中国仏教の行きついた姿・倫理的理想掲げる北山・一転して、動・宝頂山の像」の三段落からなるこまやかで懇切な記事を掲載している。

仏龕（ぶつがん）は南北に分かれている。南の仏龕は晩唐と五代のもの。残存する稀少（きししょう）な五代の石仏群である。その中で数珠手観音と水月観音に目を留めた。ともに一メートル

ル足らずの石仏で、可憐（かれん）掬（きく）すべしといった風趣。前者の閉じられた眼、横一文字にやが開かれた唇（くちびる）、左手首に軽く添えられた右手、膝（ひざ）あたりで衣装の線が交差して、衣紋の流れを一たん引き締めて、膝下で、また心持ち開く裾（すそ）模様。そのしなやかさ幼女の姿態が、限りなく人をやさしい冥想（めいそう）の世界へといざなう。俗に媚態（びたい）観音と呼ばれるが、これはまさに清純観音である。数珠手が立像であるのに対して、水月観音は坐像である。開かれた眼、ひきしまつた唇が対照的である。

歌集中一首詠われた清艶観音にどれほどの感動がこめられているかは、「重慶日記」と読売新聞夕刊に発表された文章で理解を越えた鑑賞をすることができる。霧深い蜀の地に赴任したひとりの心に響いた媚態観音が、「五代の石仏が南唐後主李煜の哀婉な詩情」を感じさせたことも首肯できる。

私は、二〇〇六年正月にこの大足を訪れた。宝頂山の方から入ったが、写真でないまでも、六道輪廻や地獄図絵には、これを眺めて教化されたであろう民衆の存在を強く感じさせる迫力を覚えた。北山（龍崗山）の方は、もうすこし古い精神的悦楽を具現しているといえるだろう。敦煌莫高窟の唐代のものに近い世界と言えるかもしれない。

長江も黄河もなびけこの雨になびかざるなしなびきてゆかん
耳うらに霧は音して沈みくる血のいろのごとき太陽見たき
ぎらぎらと熱風のなかに光りゐて鳴れり長江は水こだまして

心瘦せていまだしやぶりの雨のなか夜の底深く歩まんとして
重慶にわれは一つの火を抱き来たりしものよその火は消さじ
水脈^{みづ}なして高まりしまま長江の水の輝き^{かき}天空に散る
ゆふぐれをわづかにたもつ朱^{しゆ}が残り江^{かう}は無^む限^{げん}の闇におちゆく

『長江無限』

日本の河川になじんだ人にとって、長江や黄河は、あまりに大河である。古代文明はぐくんだ中国を代表する大河が雨になびき、みずからもなびきてゆこうとする志は、あこがれの中国に赴任した作者の心の律動を表現している。想いの外に重く激しい長江を、高温多湿の重慶で体験していく。生活のかたわらを流れる大河は飛ぶこともあり、「蜀犬日に吠ゆ」の故事^{ごと}どおり、晴天の太陽が稀有^{こぼ}である四川である。長江上流における最大の都市「山の都」重慶は、長江と嘉陵江との間の半島のような丘陵に市街地は伸び、「家を出れば坂を登る」日常であるらしい。夏は武漢や南京とともに長江沿岸の「三大火鉢」のひとつであり、冬は「霧の都」といわれる。このような風土からくる痛みが、日本人石川にはあつたかもしれない。異郷の外語学院で日本語を教える生活、良き人々にかこまれていたとしても、時間の澱^いみは浸潤^{しんじゆん}していく。心瘦せる日々であつたに違^{ちが}いない。

水運の発達した重慶は、物質集散地として、アヘン戦争後帝国主義の侵略の的となった。国民党政府の臨時首都となり、抗日戦争を経て、毛沢東が重慶入りし会談をしたことは有名である。一九四九年解放された都市は共産党の指導下に工業基地としての発展もとげる。

ともしびの暗き紅岩の街に住み身に添ふ病ひに気づきて眠る

『長江無限』

紅岩村は、抗日戦争時、共産党の局や第一八集團の事務所があり、毛沢東が重慶会談の折投宿したという「紅岩革命記念館」のある街である。

紅岩という地名を詠みこんだ作品に、重苦しい雰^{ふん}囲^い気があるのも、重慶の都市の歴史をひも解けば、大中国という以上に、理解を開くことができる。日本人の重慶および長江詠として国交回復後に成立したのである。

中国の旅のあひだにわが患者あをぞめて糖なめしはまこと

北京にてひきたる感冒に四五日はあな憂わが耳鳴りまさるまで

「未来」一九八八年一月号

『中国の世紀末』できて来る。

産みたての卵はかなし淡く降るひかりのなかの誤植の糞も

「未来」一九八八年九月号

ともに「鶯卵亭消息」と題された「未来」発表歌である。岡井隆

歌集『中国の世紀末』は一九八八年七月刊である。一九八七年十月末から十一日間の中国旅行詠を所収し、「上海・ロマネスク」「船の上の弦楽」「時、そして連」「間投詩篇」「人麻呂の船」「北京・ユーモレスク」からなる。その「あとがき」

一人の遊び人として土地土地を歩くというスタイルは、一九七〇年に九州へ行った時に身につけたのであった。生活している、暮らしている人々を、定職をもたない流れ人として見てゐる。これは寂しくて自由な態度である。異性をともなえば、より一層、へ流れ」とへ遊び」が深まる。

NHK学園短歌講座講師として同行するという旅の動機、づけの前に言挙げされた「流れ」とへ遊び」が長江を浮遊する。巻頭のエピソードはロマ書十三―十二へ夜ふけて日近づきぬ。然れば我ら暗黒の業をすてて、光明の甲を着るべし。これは、「新約聖書」をみるとパウロの手紙らしい。光明を甲として身につけなければならぬいほどに暗黒は深いと考えるべきだろう。巻頭歌にある「この世の見ゆるもの」をこの世の外に遊びながらこそ見ようというのだろうか。「未来」一九八九年七月号で佐久間章孔は書評をしている。

岡井隆が「中国」に託して、どうしても言いたかったこと、それは、「ただすぎてゆく時の漣」と、我々は、あの戦争責任にもかかわらず、言ってしまった良いのだよ、ということではあるまいか。

端的に表現すれば、これに尽きるものもあるかもしれないが、もう少し別の視点から考えてみたい。

これの世のへ見ゆるものことごとく見むたとへこの世の外に遊ぶとも

長江はくるしむ川と思はむかその上に寝て夢ぞみだるる

重慶の寒き瓜は卓上にあれどもわれはさそはれなくに

中国よ、ふるき花卉のすがしさに咲きかへるまで待てと一言ふか

いにしへゆ深し深しと思ひ来ぬすべてが違ふ闇のいろさへ

岡井隆「中国の世紀末」一九八八年七月刊

二十歳のときに、中華人民共和国の建国に会い、その進展を同時代人としてみてきた岡井が、黄なる陸にはせた夢は「間投詩篇」の「鬼域にて」の詩句にあふれ、「たとえようもなく愛にちかく」共振したのだと考えられる。黄大陸へ五十九歳の遊び人が流れにしたがつて飛び、長江に身をゆだねる。巻頭歌の「この世の外に遊ぶ」という表現は、二十歳から時空を駆けてきた人の含羞なのだ。

延安に雌伏の兵をやしなわん長旅のおわり聞に入る父

つややかに思想に向きて開ききるまだおさなくて燃え易き耳

岡井隆「土地よ、痛みを負え」一九六一年刊

初出は一九五七年「ナシヨナリストの生誕」三十二首の連作で、作者二十九歳の作品である。小池光は、短歌史的に短歌が個人的詠嘆から離れ、思想を語る器になった前衛短歌運動にとつての記念碑だと評価している。

中華人民共和国が成立して、昭和三十年代に展開する東西世界の緊張や、民族独立は、否応もなく青年を焦燥へ駆りたてたにちがいない。延安は中国共産党の抗日・革命の根拠地であり、雌伏の日々

を送った「黄大陸」を父として、ナショナリストは生誕する。このように詠うことで岡井は時代を疾走したが、あくまでサイドカーに乗っている含差、うしろめたさがあったのではないだろうか。

「つややかに」は発表当時の詩的磁場を離れた時空においてもっと広い普遍的な読みを許容する。革命思想だけではない、若き日に会おう多種多様な思想に開いていく耳を思わせ、その触覚的な感受性が青春性をふくみながら心を開かせる。愛誦性がある。

この連作があることよつて、「中国の世紀末」は陰影を濃くし、^{ホカチン}「怨恨」に彩られる。

簡体字（^{ヘン}云）のなかから見えてみし党の大会を終りし都

（近代）といふくれなみの的^マ一つ病んで行くのが世紀末とや

『中国の世紀末』

岡井隆が木下李太郎に関心深い部分をもつことは納得の行くことである。『木下李太郎全集』の月報に「アララギ」と「明星」における李太郎を執筆し、若き茂吉や赤彦が、いかに丁寧に遇したか、新しい「アララギ」を創るために必要だったこと、「食後の唄」がアララギ発行所から出たことなど面白く記述されている。「未来」一九八八年八月号の「太郎の庭（十）」にくつきりと「中国の世紀末」への影響が表現されている。

『中国の世紀末』（六法出版）が出来てきた。わたしの十三冊目の歌集だが、中国旅行を材料にしている点では、『支那南北記』（李太郎）と同断だ。内容の比較をするつもりはない。た

だ、かれにあつては医学は、まだ洋々たる前途を持ち、未知の闇にみちた未来に属していた。わたしにとつては、もはや終焉に近い一領野であつた。

李太郎を「まるで女をかえるみたいに、美術からキリシタン文学へ、また俳諧や絵画へと、享楽の対象をかえて一生をおえた」と評する岡井にとつて、詩人李太郎、享楽者李太郎は先達だったにちがいない。

木下李太郎は、大正九年七月末から奉天を退去し、木村莊八と数ヶ月の旅に出た。その所産が、大正十五年に出版された『支那南北記』である。一九二〇年の北京を印象的に表現している。

後年わたしは世界を漫遊していろいろの珍奇を見たが、都会としては、クウバ島のハバナ、仏蘭西^{フランス}のバリ、伊太利^{イタリア}のシエナの他には、この北京が、最も特徴あるものとして長く鮮かに記憶に残っている。

湖北武昌蜂起から辛亥革命を経て中華民国が成立し、清朝が廃絶したのは一九一二年であるから、袁世凱が登場し南京から北京を首都にして八年、対華二十一ヶ条、日中両軍の衝突、内戦、五四運動と、年表的に拾つてさえ不安定極まりない首都北京は、風物的にも特徴的だったのであろう。日中戦争、共産党革命、中華人民共和国成立後、李太郎より六十七年後の北京を前述の思想的心情をもつて岡井は訪れたことになる。「北京・ユーモレスク」の短歌の背景である。同じ『支那南北記』の漢口の記述。

さて、江南湖北は支那の最もクラシックの地方であるから、その鑑賞には学問がある。それのないわたくしは単に景色を見てあるく旅行者に過ぎなかった。然しただそれだけでも実に得心がいったのであった。

この旅行者の視点こそ、岡井が「あとがき」で述べたへ遊び人に近い。ただし、このへ遊び人には、李太郎に医学や石仏を始めとして仏教美術への関心があったのに比べて、「ナシヨナリストの生涯」を詠った共產主義国家への関心があったのである。また、李太郎は、長江の風景に、夏珪や雪舟の山水画を想起しているが、岡井は、人為的風物の方へ視線を向けている。解きがたい泥流に身をゆだねながら、あるやすらぎと悔しさを詠嘆していくのである。かつて青年岡井が予期しなかった中国の世紀末を旅し、そこにはへ怨^{ウツ}恨^ミもあれば、解放もあったのである。

長江の巴蜀三峡に旅して魅力的詩歌をなした詩歌人の作品を歴史的に概観して論じた。

【主要参考文献】

- 『棧雲峡雨日記』竹添井井著 岩城秀夫訳注 平凡社
- 『長江三峡大観』長江水利委員会 楊哲三訳 中国水利水電出版社
- 『杜甫の旅』田川純三 新潮選書
- 『杜甫草堂記』土岐善麿 春秋社
- 『杜甫への道』土岐善麿 光風社書房

『土岐善麿の歌』冷水茂太

『重慶日記』石川一成全歌集

『読売新聞』

『長江万里行』鄭然権訳

『支那南北記』世界紀行文学全集木下李太郎

『木下李太郎全集』

『鑑賞・現代短歌十 岡井隆』小池光

『未来』

【引用詩歌テキスト】

『杜甫 上』中國詩人選集

『四月抄』土岐善麿

『東西抄』土岐善麿

『黄昏に』現代短歌全集

『土岐善麿歌集』

『対訳 郭沫若詩集』彭銀漢訳

『石川一成全歌集』

『中国の世紀末』岡井隆

『岡井隆歌集』

光風社書房

ながらみ書房

読売新聞社

恒文社

修道社

岩波書店

本阿弥書房

未来短歌会

岩波書店

東峰出版

初音書房

筑摩書房

春秋社

花曜社

ながらみ書房

六法出版

短歌研究社

(たかさき・あつこ)